

18. 《西行の大往生》

「願はくは 花の下（した）にて 春死なむ そのきさらぎの 望月（もちづき）のころ」

これは、西行（さいぎょう：注1）が50歳代で詠んだ歌です。当時の平均寿命からすれば十分に長生きしたときでした。しかしその後、歴史の大役を担うことになります。

西行は、平清盛と同年で「北面の武士」（注2）のエリートでしたが、23歳で出家し、諸国を巡りながら和歌を残します。

1180年（治承4）、東大寺が不運にも兵火にまみれ、翌年平清盛が死亡。1186年（文治2）、西行は、その再建資金を催促するために、隠遁していた伊勢から奥州の藤原秀衡（ひでひら）を訪ねることにします。西行は、すでに68歳。保元の乱、平治の乱（注3）を経験し、まさに源平合戦が終わったときに、老骨に鞭打って旅に出たのです。

途中、奥州への旅の安全を確保するためでしょうか、鎌倉の源頼朝に出会います。頼朝は、西行より約30歳年下ですが、このときすでに、軍事・警察権を握る守護を配置して源義経を追討していたからです。（注4）

この面談も卒なく終わり、東大寺再建資金の話がまとまります。西行は伊勢に戻り、秀衡は程なく死亡。秀衡に匿われていた源義経は打たれ、そして藤原氏も滅ぼされました。

それから2年後、西行が72歳のとき、冒頭の歌のとおり満月の日に亡くなります。歴史の大役を終えての大往生だったといえるでしょう。西行は、新古今和歌集に一番多く歌が採用され、能、歌舞伎、落語などの演目にもなっています。

注1：	主要人物	生 没 年
	西行（さいぎょう）	1118－1190
	平清盛（きよもり）	1118－1181
	源頼朝（よりとも）	1147－1199
	源義経（よしつね）	1159－1189
	藤原秀衡（ひでひら）	1122－1187

注2：北面の武士：上皇の御所の北面に詰め、警備に当たった武士

注3：保元の乱：1156年（保元元）、鳥羽法皇の死後、崇徳上皇と後白河天皇が戦い、後白河天皇が勝利

平治の乱：1159年（平治元）後白河天皇の配下の平清盛と源義朝（頼朝の父）が戦い、平清盛が勝利

注4：源平合戦：1180（治承4）－1185（元暦2）に平氏と源氏が戦いました。源氏が勝利した後、頼朝は人気のある弟の義経を追討します。

写真は、①武蔵野で隠者と会う西行（西行物語絵巻（俵屋宗達作）の一部 Wikipedia 掲載画像より）、②浮世絵の西行（MOA美術館所蔵の絵をトリミングし、細見が加筆）

①



②

